長洲町立長洲小学校　校長便り　No.３７

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和４年１０月３日(月)

自信をつけるために

書道をやってきたお陰で、様々な世界の、様々な役職の方と接する機会があった。その出会いの中で気付いたことがある。

芸術や学術、様々な職業でその道を極めた方には、自信が感じられる。そして自分の能力を「ひけらかす」ということをしない。ある議論を持ちかけられたとする。道を極めた方は、駆け出しの理想論も傾聴してくれる。逆の場合はよく喋る傾向があるようだ。自信がない者ほど、言い訳、正論やルールへの反発、わがままが多い。

では、自信をつけるためにはどうすれば良いのか。自信は基本的に努力に裏付けられたものだから、今すぐつけることは無理だ。精進した結果だから、努力をした者には勝てない。文化や芸術に限らず、運動も然り。自分を肉体的にも精神的にも鍛えておくことで自信を持ち、他人にも優しくなれるようだ。例えば「自信」「勇気」「愛情」「良心」「尊敬」等々。このような目に見えないものを身につけるためには本人の努力に加え、子ども達を取り巻く家庭、学級、学校、地域等が関係していることも確かだ。

「実るほど　頭を垂れる　稲穂かな」でありたいものだ。私には中々できないことなので、今も勉強しているところである。この考え方はできるだけ早く身に付けていた方が、将来様々な場面で役に立つと思われる。

「主体性について思う」その③

⑤「大人も一緒に実体験」

主体性を育てるうえで重要なのが「実体験」です。最近は本や動画から知識を得るだけで実体験が疎かにされていると感じています。それを活用して実際に体験するように心がけてください。自然遊び、実験遊び、スポーツ、芸術活動など、子供が興味をもったことにはなるべく体験させてあげたいですね。体験を積むことで、主体性を育てることはもちろん、子供の将来の選択肢を広げることにもなります。因みに、私は教諭時代から子供達と一緒に強歩会を実施していました。大人も子供もフルマラソンの距離「42.195㎞」を歩くのです。活動を共有することで、達成感や成就感を共有することができ、掛け替えのない時間になりました。

⑥「活動の過程を評価する」

大人はつい「子供が何かできるようになること」を評価し子供と接してしまいがちです。暗に成果を求められるような中では、やる気を失う子が多いです。目に見える成果以外にも子供は成長しています。一番大切なのは「子供を信頼し、コミュニケーションを取り、大人が急がない。」ことです。保護者と子供が信頼しあえている家庭は、どこかで必ず子供が伸びます。多くの保護者の方から「分かってはいるんですけど、つい強く言ってしまう。」と聞きます。子供のことを思う保護者の方はそういうものです。でも、子供との時間を楽しんだ方が結果は良いようです。

以上、生意気なことを3回に分けて書きましたが、ご家庭ではどのような取組をされていますか?気になります!?

シリーズ「自分を語る」#37

手術も終わり、あとは回復に向けて努力するだけです。私が受けた手術は「腰椎前方固定術」と呼ばれる手術でした。文章で書くとこんな感じです。

①へそを中心として腹部を縦に12㎝ほど切開します。

②そして、小腸?をよけて腰椎に達します。

③腰椎の上から4番目と5番目（腰骨の4番目と5番目）の間の椎間板を確認します。

④レントゲンと顕微鏡で目視しつつ、傷んだ椎間板部分を切除し、正常部分は残します。

⑤椎間板の代わりに、骨盤から採取した腸骨をブロック状にし、はめ込みます。

⑥椎間板と腸骨の隙間に、腸骨を砕き脂肪を混ぜたものを埋め込みます。

⑦避けていた腸をもとに戻して、縫合します。

てな具合ですね。当時の同僚に話をすると、「え、小腸をよけて?　外に取り出して乾かないように霧吹きかなんかしよっとじゃないと?」とか、勝手なことを言っていました。この手術は、人工的に腰椎に骨折状態を作っていることと同じで、骨がつながるまで安静が必要です。腰椎の4番と5番の骨を、腸骨によってつなぐ手術ということで、術後、4番5番は一つの骨の状態で繋がっていました。これによって、体が更に固くなるのでした。

さて、手術が終わって、多分麻酔担当のお医者さんが「澤田さん、終わりましたよ。」と声をかけました。私は普通に眠りから覚めた時と同じような感じで目覚め、「え、何が終わった?」と、訳の解らない状況で、周りを見て、「あ、そうだった、俺、腰の手術したんだ。」ぼ～っとした頭で、ということは痛みがあるはずと思い、「痛み」を感じようとするのですが、何の痛みも感じません。まだ、麻酔が効いている状態ですから当たり前です。病室までどのようにして移動したのかは全く覚えておらず、酸素マスクがうっとうしかったことだけ覚えています。病室では両親や親戚が待っていたようで、「どぎゃんかい?あんびゃぁは?」「よおがんばったなぁ」「あしゃいごか?（足は動くかの意味、当時健在だった私の祖父の言葉です。）」と、熊本弁による労いの言葉をかけてもらいました。すぐに執刀医の先生が来られて、幾つかの質問をされました。足の裏を触りながら「澤田さん、足を踏んでみてください。」「今度は逆につま先を上げてください。」「触っている感覚は分かりますか?（実際はかなり強くつねるそうです。）」家族の話によると全ての質問にきちんと答えていたそうですが、私はあまりこの時のことは覚えていません。ただ終わったという安心感がありました。家族は先生の説明に安心したと言っていました。「足の動きも正常、感覚も正常、あとは時間が薬です。」この言葉にホッとしたようです。

手術当日は痛みを感じなかったのですが、熱が高く汗を相当かいたようです。2日目位から痛みが出始めました。もちろん腰痛ではなく、傷の痛みです。傷も大変でしたが、ベッド上で仰向けのままおしっこをするということが一番大変でした。実は、当時この手術後は、最低4週間ベッド上で寝たまま過ごさなければならなかったのです。これが一番辛かったですね。おしっこもそうですが、大きい方は大変です。便器をお尻に当てて、力むと傷が痛みますので自然の力に任せます。その後がとても恥ずかしいのです。同世代の看護師さんが、丁寧にお尻を拭いてくださるのです。私は天井を見ながら、切ない気分を味わうと同時に、早く治して復帰するぞと誓うのでありました。　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）